

# 富山・東木津遺跡

- 1 所在地 富山県高岡市木津・佐野
- 2 調査期間 一九九八年(平10) 六月～一九九九年四月
- 3 発掘機関 高岡市教育委員会
- 4 調査担当者 荒井 隆
- 5 遺跡の種類 集落跡・官衙跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～中世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(石動・富山)

東木津遺跡は、高岡市中央部、小矢部川と庄川に挟まれた、標高約一一～一二mの微高地に位置する。本遺跡付近は、往古の庄川が形成した扇状地の末端部にあたる。同時期の遺跡として、本遺跡の北北東約九kmの伏木には、御亭角廃寺・越中国庁推定地・越中国分寺などからなる越中国府関連遺跡がある。また、北西約五kmには、「人長」などの墨書土器が出土し、川人

駅と想定されている麻生谷遺跡がある。

東木津遺跡は、分布調査の結果、南北二五〇m東西六〇〇mの範囲にわたる。今回の発掘調査は、都市計画道路路下伏間江福田線建設に伴うもので、南東から北西方向に幅約一五m長さ約二三〇mの範囲を調査した。確認した遺構は、掘立柱建物・溝・土坑・自然流路である。木簡は調査区東端の包含層、および自然流路SD二〇五とその直上の包含層から出土した。

調査区東端は、自然地形の落ち込みである。今回の調査で確認した部分は、幅約四〇・〇m深さ約五・五mである。この落ち込みは東木津遺跡の東端にもあたる。出土遺物は、古墳時代前期及び八～九世紀の遺物を中心としている。この落ち込みの下部には、古墳時代前期の溝が掘られている。この溝は、古墳の周溝となる可能性がある。この落ち込みの表土に近い包含層で、木簡を一点確認した。また、「悔過」「平」と記した墨書土器が出土している。

SD二〇五は南東から北東に流れ、幅三・八～八・五m、深さ八〇cmを測る。木材によって両岸に護岸工事を施し、東岸には張出部を造り出している。張出部は、長さ四・六m幅二・五mを測る。溝の両側では、溝とほぼ直交するように、一〇棟の掘立柱建物が検出された。

SD二〇五の出土遺物は、八～九世紀のもののみである。木簡は八点出土している。共伴遺物として、銅銭(神功開宝)一点、斎

申・人形・琴形・曲物・挽物・箸などの木製品、墨書土器などがある。墨書土器は、「悔過」「宅」「明家」「静」「石見」「竹原」「節」「主」「八」「南」「林」「田中」「寺万呂」「達万呂」「家万呂」「成売」「比与」「井」「井」などがある。

8 木簡の釈文・内容

## 調査区東端の包含層

- (1) 二〇〇神宮〇涅槃浄土〇米入使

[ ]  
九月五日廿三枚入 [御力] 師 [ ]

154×21×5   011

## SD二〇五直上包含層

- (2) 「は     くや  のは  」

250×34×15 011

## SD-105

- (3) ☐ ☐ ☐ ☐

94×24×7 081

- (4) 十万呂

(163) × (20) × 3 081

- (5)

•  $\left[ \begin{array}{|c|} \hline \phantom{0} \\ \hline \end{array} \right] (91) \times 17 \times 5 \quad 051$

- (6) ☐ 薦

(70)  $\times 12 \times 5$  059

- (7) 十二月

122×12×6 033

- (8)
- 「方」<sub>方カ</sub>

122×20×7 032

- (9)  $\left[ \begin{array}{c} \angle \\ \square \\ \square \\ \square \\ \square \end{array} \right]_{\text{石一斗力}}$

192×13×6 033

- (10)  $\left[ \begin{smallmatrix} \wedge \\ \text{白} \\ \square \end{smallmatrix} \right]$

108×12×6 033

(1)は「神宮」がどこを指すかは不明であるが、「涅槃浄土」を祈願するために、その神宮へ米を納めることを記したものである。

「米」の上の字は「𥽿」（紙の異体字）か「𥽿」であろう。御師の活動を示すものとしても興味深い。そして御師の存在からすると、神宮は伊勢神宮であろう。この木簡の出土は表土に近いため、伴出遺物から時期を推定することはできないが、中世に下るものであろう。

(2)は、短冊形の木簡である。かな文字で記しているが、内容は不明である。SD二〇五直上の包含層から出土した。

(3)は両端が折れているため、木簡の原形は不明である。墨痕が薄く、文字の判別はできない。(4)は下部と右側面が割れている。裏側は、文字の半分が割れているため、文字の判読はできない。(5)は、

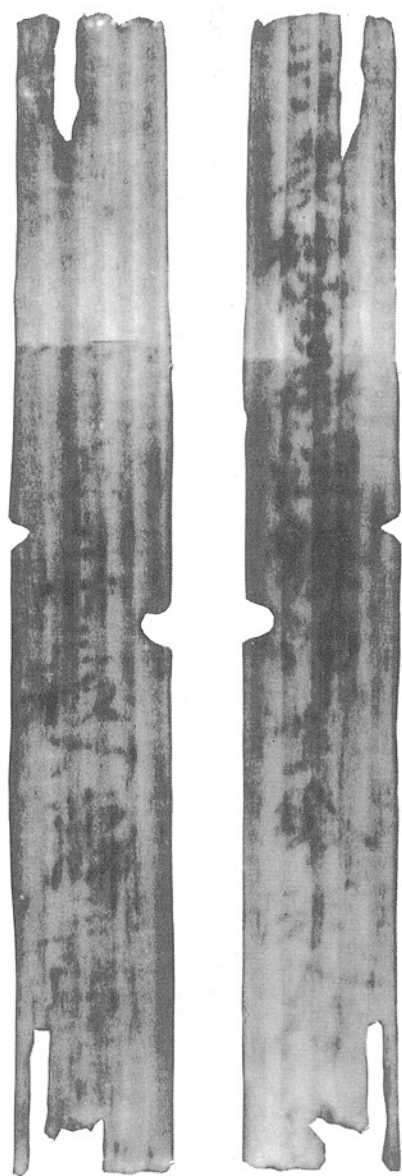
木簡表面を削っており、墨痕が残っているだけで、文字は判読できない。(6)は下端を尖らせている木簡の下部である。「薦」の上の文字は、禾偏の文字であるが、文字の右半分が割れて失われている。(7) (10)は、左右に切込みを入れ、下端部を尖らせた付札状の木簡である。(7)は「十月」と書いた後「一」を書き加えた可能性がある。下半部は、墨痕が薄い。(8)は下端部を切り折っている。(9)も墨痕が薄い。

本遺跡では、文字の書かれていない木簡状木製品が多量に出土している。また木簡も、墨痕が薄く判読が困難なものが多いが、これ

は表面を削って廃棄したためと考えられることから、本遺跡は多量に木簡を必要とするような性格の場所であったと推測できる。

なお木簡の釈読は、奈良国立文化財研究所の館野和己氏、山下信一郎氏による。

(荒井 隆・岡田一広)



(1) 原寸 (赤外線テレビ)